

【研究ノート】

井泉水編 『一茶俳句集』 入集の句 (四)

黄 色 瑞 華

凡 例

- 一 一行めに、井泉水編『一茶俳句集』の本文をおく。ただし、漢字は現行文字とし、ルビは省略した。
- 二 二行めに、出典を示し、句帳・紀行などは( )内にそれが記されている条の年月を示した。年号は改元の月日にかかわらず元年一月からとした。
- 三 原本と表記が異なるものは、出典の次の㊦に原本のそれを示した。
- 四 注は、「前書」の異同と、他書との異同を示すにとどめた。
- 五 原典は、主として一茶全集本により、『浅黄空』などは一茶叢書本その他によった。また、『八番日記』は風間本により、特に異同がある場合、梅塵本と対照した。

夏 (承前)

更衣

曙の空色衣かへにけり (文化四)

出典 文化句帳(文化4・4)

瘦藪も窓も月さすころもがへ (文化十年)

出典 文化句帳(文化1・4)

下谷一番の顔してころもがへ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・4)・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記、前書「手まり唄」。志多良・句稿消息、前書「手まり唄」、座五「更衣」。文政版発句集、前書ナシ、座五「更衣」。嘉永版発句集、前書ナシ。

蒲公英は天窓そりけり更衣 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)

㊤ 上五「蒲公〔英〕は」。七番日記(文政1・6)に、「蒲公〔英〕も」。句稿消息に、「蒲公〔英〕も天窓そりつゝ」。

手盥に魚遊ばせて更衣 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・4)

御祝儀に雨も降りけり更衣 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・5)

㊤ 上五「御祝儀(饗)に」。

としとへば片手出す子や更衣 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4、12)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

㊤ 七番日記(文化12・7)に、中七以下「片手広げる棚経哉」。

衣替て居て見てもひとりかな (文政二年)

出典 八番日記(文政2・4)

てて親のふらんど見よや更衣 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・4)

㊦ 上五「てゝ親の」。文政句帳 (文政5・4) に、「てゝ親が一ふらんどや」。

姫のりの丸看板やころもがへ (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・4)

㊦ 座五「ころもがえ」。

親の親の其のおやののを更衣 (文政七年)

出典 文政句帳 (文政6・3)

㊦ 「親のおやの其親のゝ」を「ころもがえ」。同句帳、7・5の条末の、「此、文〔政〕六初夏ニ入」とした句群中に、「親の親の其のおやのゝを更衣」。

袷

片道は付さふらふと袷哉 (文化元年)

出典 文化句帳 (文化1・4)

鶯に声かけらるる袷かな (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・4)

㊦ 中七「声かけらるゝ」。一茶叢書「文化句帳補遺」(全集本では、「文化三―八年句日記写」と言う)の文化七年の条にも出。

小児の成長を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3、4)

おらが春・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊟ おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集、前書「小児の行末を祝して」。全集本発句篇に、「興」『文政版』中七『つんつるてんの』と誤る。

千太郎に申

はつ袷にくまれ盛にはやくなれ (文化十四年)

出典 七番日記(文化13・6)

ふだらくや赤い袷の小順礼 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・4)・希杖本句集・嘉永版発句集

㊟ 発句鈔追加、中七「赤へ袷の」。

春日野の鹿に嗅るる袷かな (文政版一茶発句集)

出典 文化六年句日記(文化6・4)・文政版発句集・嘉永版発句集

綿 抜

しんぼしたどてらの綿よ隙やるぞ (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)

㊟ 中七「どてらの綿「よ」」。句稿消息・嘉永版発句集、上五「なむあみだ」。希杖本句集、上五「長々の」。

立ながら綿引抜て出たりけり (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・4)

㊟ 句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集、中七「綿ふみぬいて」。

帷子

青空のやうな帷子きたりけり (文化九年)

出典 七番日記 (文化9・5)・句稿消息

㊦ 中七「やうな帷 [子]」。

京の夜や白い帷子白い笠 (文政二年)

出典 梅塵本八番日記 (文政2)

㊦ 座五「しろい笠」。

帷子の青空色や朝参り (文政四年)

出典 八番日記 (文政4・4)

夏羽織

夕陰や片がは町の薄羽織 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・4)

日傘

木母寺が見ゆるくと日傘哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・4)

八九間柳を去て日傘哉 (文化八年)

出典 七番日記 (文化8・4)

あんよくくや母を日傘持 (文政三年)

出典 八番日記 (文政3・4)・文政版発句集

㊦ 「歩んよくくく」。

夕陰や煎じ茶売の日傘 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・3、6)

㊧ 文政8・6 「煎茶うりの」。

夏座敷

松陰や座一枚のなつ座敷 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・9)

㊨ おらが春、中七「寝蓆一ツの」。発句鈔追加、上五「我門や」。

ことしこそ小言相手も夏座敷 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・9)

青簾

門々も雨ははれけり青すだれ (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・9)

一人吞茶も朔日ぞ青簾 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・4)

両国や小さい舟の青簾 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

蚊帳

手をすりて蚊屋の小すみを借りにけり (文政二年)

出典 八番日記(文政2・5)

蚊屋釣て夕飯買に出たりけり (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・5)

㊦ 中七「夕買〔物〕に」。

暁の別たばこや蚊屋の月 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・6)

㊦ 前書、「青楼曲」。

夕風や馬も蚊屋釣る上屋敷 (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・12)

㊦ 文政句帳(文政7・6)に、「蚊屋釣て馬も休や」。

昼寝

杉桶に花など見へて昼寝かな (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・5)

㊦ 中七「花なぞ見へて」。

継つ子や昼寝仕事に蚤拾ふ (文政元年)

出典 七番日記(文化1・6)

田の人を心でおがむ昼寝哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・5)

㊦ 中七「心でおがむ」。

山水に米を搗かせて昼寝哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・7)

扇

あさ陰に関も越えたる扇哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・4)

松島の松にして見る扇哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・5)

⑨ 中七「松にし」「て」見る」。

暮行や扇のはしの浅間山 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・5)

⑩ 前書、「浅間山の下を通りて」。「山けぶり扇にかけて急ぐ哉」と併記。

老けりな扇づかひの小ぜはしき (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3、6)・句稿消息

手にとれば歩きたく成る扇哉 (文政元年)

出典 七番日記(文化15・4、12)・文政版発句集

⑪ 文化15・4、中七「歩行たる成る」。

貰ふよりはやくうしなふ扇かな (文政二年)

出典 おらが春(文政2)

⑫ この句の前に掲げる「頌曰く、未<sub>レ</sub>拳<sub>レ</sub>歩<sub>レ</sub>時先<sub>レ</sub>已<sub>レ</sub>到<sub>ル</sub>、未<sub>レ</sub>動<sub>レ</sub>舌<sub>レ</sub>時先<sub>レ</sub>説<sub>キ</sub>了<sub>ル</sub>、直<sub>レ</sub>饒<sub>レ</sub>著<sub>レ</sub>々<sub>レ</sub>在<sub>ル</sub>モ機<sub>レ</sub>先<sub>レ</sub>、更<sub>レ</sub>須<sub>レ</sub>知<sub>ル</sub>」



有<sup>ニ</sup>向<sup>上</sup>ノ<sup>一</sup>竅<sup>ニ</sup> (無門関) の前段部の俳訳。七番日記 (12・6) に、「又扇貫ふやいなやおとしけり」「——はやくおと  
した扇哉」。七番日記 (文政1・4)、中七「早くなくなる」。

## 団扇

うつくしき団持けり未亡人 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・7 Ⅱ重出)

夕陰のはらく雨に団哉 (文化二年)

出典 文化句帳 (文化2・4)

夕暮の虫を鳴する団哉 (文化五年)

出典 文化句帳 (文化5・4)

子ども等の団十郎する団哉 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・5)

㊦ 上五「子ども等<sup>(が、カ)</sup>」の「の」。

行あたりばつたりく団哉 (文化十三年)

出典 七番日記 (文化13・7)

寝咄の切間くを団扇哉 (文政七年)

出典 文政句帳 (文政七年夏)

張かぶせくたる団扇哉 (文政九年)

出典 文政九・十年句帳写 (文政9)・希杖本句集

## 蚊遣

風下の蘭に月さす蚊やり哉 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

細々と蚊やり目出度舎り哉 (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・5)

うつくしや蚊やりはづれの角田川 (文化十年)

出典 七番日記(文化7・4)・文化三十八年句日記写

雀等が寝所へもはふ蚊やり哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・4)

駒込の不二に棚引蚊やり哉 (文化十四年)

出典 七番日記(文化14・4)

雨の日や机の脇の捨蚊やり (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

打水

打水や挑灯しらむ朝参り (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・6)

打水や水切町の月明り (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・6)

晒井

新しい水湧音や井の底に (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

さらし井に魚ももどるや暮の月 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・6)

㊦ 文政句帳、この句の直後に、「月さすや洗ひ抜たる井〔戸〕の底」――の祝ひ出たり水の月」――や草の上にてなく蛙」。

### 納涼

寛政三年春のころ、しきりに夢見の悪しければ、古郷の親ところにかかりて、弥生二十六日大江戸を発足して、さつき十八日といふに古郷へかへりて

門の木も先つつがなし夕涼 (寛政三年)

出典 寛政三年紀行(寛政3・4)・一茶翁終焉記

㊦ 寛政三年紀行には、「灯をとる比旧里に入。日比心にかけて来たる甲斐ありて、父母のすくやかなる顔を〔見〕ることのうれしく、めでたく、ありがたく、浮木にあへる亀のごとく、闇夜に見たる星にひとしく、あまりのよろこびにけされ、しばらくこと葉も出ざりけり」とし、この句を収めて結びとしてある。一茶翁終焉記には、「此野の原に年をかさねて、埋れ木の日影にうとく、藻に住む虫のむなしき音をのみなき、寛政春年春(中略)さつき十八日といふに古郷にかへりて、『門の木も先つつがなし夕涼』とは老父めでたくおはす事のうれしさあまりにかくなん。」

故ありてさはらぬ木也夕涼み (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

㊦ 前書、「甘棠」。「折れば手のくさる榎や夕涼み」と、この句の二句を記す。

木一本畠一枚夕涼み (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・11)

㊤ 前書、「杖柱」。

身の上の鐘としりつつ夕涼 (嘉永版一茶発句集)

出典 文化六年旬日記(文化6・5)・発句題叢・随斎筆紀・希杖本句集・嘉永版発句集

㊦ 文政版発句集、中七「鐘ともしらで」。発句類題集(文政3)、中七以下「鐘としりつつ夕がすみ」。

いざいなん江戸は涼みもむづかしき (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)・句稿消息

三文が草も咲せて夕涼み (文化十三年)

㊧ 八番日記(文政4・6)、「三文の草花植て門涼」。

関之没、七日くとうつりに

夜涼が笑納でありしよな (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊨ 七番日記、前書「七日くとうつりに」、中七「笑ひ納で」。この句の直前に「魁されたりなむ関之仏」と前書して、

「短夜やよしおくるも草の露」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「きのふは鮮魚に宴して、けふは松宇仏」、中七「笑ひ納めで」。希杖本句集、前書「七日くとうつりに」、上五・中七「夜涼みが笑ひおさめで」。文政九・十年句帳

写に、前書「松宇の追善」、句「夜涼みが笑止仕舞と成しかな」。

ままつ子や涼み仕事にわらたたく (文政二年)

出典 八番日記(文政2・5)

㊩ 風間本、「ままつ子や涼み仕事にわらたつき」。梅塵本、「継ッ子や涼み仕廻に藁たつき」。

江戸住人

銭なしは青草も見ず門涼み (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)・嘉永版発句集

⑥ この前書で、この句と「暑日や青草見るも銭次第」の二句を記す。梅塵本、前書「江戸住居」、座五「川すゞみ」。嘉永版発句集、前書「江戸住人」、座五「門すゞみ」。

切らるべき巾着はなし橋涼 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・3)

両国橋上

下見ても法図はないぞ涼船 年号なし

出典 文政版発句集

⑦ 嘉永版発句集、中七「はう図がないぞ」。

田植

耕ずして喰、織らずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎなり

もたいなや昼寝して聞田うへ唄 (寛政一一年)

出典 寛政紀行書込(寛政7・1・8・4)・寛政十年四月十九日付一白宛書簡・文政九、十年句帳写・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

⑧ 寛政紀行書込、前書「十二日キハを出て」。

書簡、前書なし、座五「たうえ唄」。

文政九・十句帳写、前書耕ずして喰

ひ、織ずして着る体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎなり」とあり、「花の影寝まじ未来が恐しき」「真黒な藪と見へしが寒念仏」に続いてこの句を記す。「勿体なや——聞田植唄」。文政版発句集・嘉永版発句集、前書「粒々皆心苦」。希杖本句集、前書なし。

信濃路の田植過けり風巾 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・9)

㊦ 前書「宛丘」、座五「風」。

しなのぢや山の上にも田植笠 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・8)・発句題叢・希杖本句集

㊦ 板本発句題叢(文政3)、座五「田植うた」。嘉永版発句集、中七以下「上の上にも田うゑ唄」。

どつしりと藤も咲也田植唄 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

早乙女

早乙女や箸にからまる草の花 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・6)・発句題叢・文政版発句集・嘉永版発句集

田草取

二番草過て善光寺参り哉 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・6)

粟蒔く

藪添に雀が粟も蒔にけり (随斎筆紀)

出典 随斎筆紀(文化11)

夏 氷

雪国の雪いはふ日や浅黄空 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)・句稿消息

㊦ 句稿消息、中七「雪祝ふ日や」。

冷水

水売の今来た顔やあたご山 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・5)

両国や冷水店の夜の景 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

心太

旅人や山に腰かけて心天 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・4)・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 嘉永版発句集、中七「山にこしかけて」。

一尺の滝も涼しや心天 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)

心天芒もともにそよぐぞよ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)

あさら井や小魚と遊ぶ心天(嘉永版一茶発句集)

出典 発句題叢(文政3)・発句鈔追加・嘉永版発句集

㊦ 希杖本句集、「山水や小魚とあそぶ」。

冷汁

冷汁や木陰に並ぶ御客衆 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・6)

夕暮やせうじん<sup>マヤ</sup>鮓も角田川 (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・4)

蓼の葉も紅葉しにけり一夜鮓 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・3、6)

鹿の子

鹿の子や横にくはへし萩の花 (文化二年)

出典 おらが春 (文政2)

上人の声を聞しるかのかのこ哉 (文政五年)

出典 文政句帳 (文政5・4)

蝙蝠

かはほりやさらば汝と両国へ (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・4)・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

かはほりの植木そそりや夕薬師 (文政八年)

出典 文政句帳 (文政8・6)

㊦ 上五中七「かはホリの植木せりや」。

時鳥

暁のむぎの先よりほととぎす (享和三年)



出典 享和句帳(享和3・11)

㊦ 中七以下「ムギの先よりほととぎす」。

うら須磨は古き烟や時鳥 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・4)

㊦ 中七「古き烟りや」。

木母寺は夜さへ見ゆる時鳥 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・3)

我汝を待こと久し時鳥 (文化七年)

出典 七番日記(文化7・4、14・3、14・4)・文化十四年四月三日付魚淵宛書簡・おらが春・文政版発句集・嘉永

版発句集

㊦ 七番日記(14・4)、前書「老翁岩〔に〕腰かけて一軸をさづける画」。同(14・4)、前書「老翁岩〔に〕腰かけて一軸をさづける所」。魚淵宛書簡、前書「老翁岩に腰かけて一軸を授くる図に」。おらが春、前書「老翁岩に腰かけて一軸をさづくる図に」、座五「ほととぎす」。文政版発句集、前書同上、中七以下「待事久し郭公」。嘉永版発句集、前書「こしかけて」、中七以下「待事ひさし時鳥」。

時鳥橋の乞食も聞れけり (文化八年)

出典 七番日記(文化8・3)

㊦ 七番日記(8・4)、中七「橋の乞食に」。

時鳥つつじは笠にさされたり (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

㊦ 中七以下「つつじは笠にさされたり」。

今ごろや大内山のほととぎす (文化九年)

出典 七番日記(文化9・3)・株番・希杖本句集

㊦ 座五「ほととぎす」。七番日記(9・3)、「時鳥大内山を夜逃して」。株番、「郭公大山内を夜逃して」。

それでこそ御時鳥松の月 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・3)・株番・随斎筆記

㊦ 文政版発句集、「これでこそ——松に月」。嘉永版発句集、「是でこそ——まつに月」。発句類題集、上五「是でこそ」。

白程の月が出たとや時鳥 (文化十年)

出典 七番日記(文化10・4)

らふそくでたばこ吸けり時鳥 (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・2)

㊦ 上五「らふそくで」。

も一声まけろこれく時鳥 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3、4)・句稿消息・希杖本句集

草庵夜雨

行燈に笠をかぶせて時鳥 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

㊦ 希杖本句集、中七「かさゝしかけて」。

百間の物見明けり時鳥 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4)

急ぐかよ京一見のほととぎす (文政二年)

出典 八番日記(文化2・4)

㊦ 上五、座五「急ぐかよ——ほととぎす」。

あたり八間が起るやほととぎす (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・3)

㊦ 座五「ほととぎす」。

猪牙舟もついでくぞ時鳥 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・5)

閑古鳥

情四十年、已に不足畏の員に入

我はあの山の木性マツや閑古鳥 (享和三年)

出典 享和二年句日記(享和2)・享和句帳(享和3・10)

㊦ 享和二年句日記、前書ナシ。享和句帳(3・8)、前書ナシ、中七以下「島の木性(精)やかんこ鳥」。

越の立山にて

はいかいの地獄はそこか閑古鳥 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・12)

㊦ 座五「閑古鳥」「布穀鳥」両案を記す。

かんこ鳥しなの桜咲にけり (文化三年)

出典 文化句帳(文化3・4)・発句鈔追加

⑤ 中七「しなのゝ桜」。  
芋茶屋もうれしいものよ閑古鳥（文化三年）

出典 文化句帳（文化3・4）

下総の四国巡りやかんこ鳥（文化七年）

出典 七番日記（文化7・4）

切株にすりばちきせてかんこ鳥（文化八年）

出典 七番日記（文化8・4）・我春集

⑥ 我春集、中七「すり鉢きせて」。

前の世のおれがいとこか閑古鳥（文化十年）

出典 七番日記（文化10・4）・志多良・文政版発句集・嘉永版発句集

⑦ 七番日記、中七「いとこ同土や」と両案を記す。

先住のつけわたり也かんこ鳥（文化十二年）

出典 七番日記（文化12・4）・随斎筆紀・文政版発句集・嘉永版発句集

⑧ 文政版発句集・嘉永版発句集、中七「つけわたりなり」。

帰る迄庵の番せよ閑古鳥（文化十四年）

出典 七番日記（文化14・5）

此おくに山湯ありとや閑古鳥（文政四年）

出典 八番日記（文政4・6）

⑨ 風間本、座五「かんこ鳥」。梅塵本、座五「閑子鳥<sup>(古)</sup>」。

桑の木は坊主にされてかんこ鳥 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4、6・4)

㊦ 八番日記(文政3・4)、中七以下「坊主(て)きされてけしの花」。文政句帳(6・3)、上五「桑の木や」。

葭切

よしきりや空の小隅のつくば山 (文化九年)

出典 七番日記(文化9・5)

㊦ 七番日記、この句の次に中七「四五寸程な」。

よし切やことりともせぬちくま川 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

よし切や一本竹のてつぺんに (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

水鶏

遠水鶏小菅の御門しまりけり (文化七年)

出典 七番日記(文化7・6)

㊦ 同月の条に重出。

木母寺の鉦の真似してなく水鶏 (文化九年)

出典 七番日記(9・5)・句稿消息

㊦ 句稿消息、座五「鳴水鶏」。文政句帳、中七以下「鉦の間を水鶏なく」。

暮

雲を吐く口つきしたり暮 (文政二年)

出典 おらが春(文政2)・文政版発句集・嘉永版発句集  
まかり出たるは此藪の暮にて候 (文政二年)

出典 おらが春(文政2)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 文政版発句集・嘉永版発句集、「罷り出たるは」。風間本八番日記(文政2・7)、「曲出るは此藪の蟾にて候」。梅塵本八番日記、「まかり出たるものは」。

螢

はたくと螢とぶ夜の桶茶哉 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・4)

舟引の足にからまる螢哉 (文化二年)

出典 文化句帳(文化2・6)

㊦ 七番日記(10・5)、「筏士が箬にかけたるはたる哉」。志多良・句稿消息、「筏士の箬にかけたる螢哉」。八番日記、「筏士の箬にからまる螢哉」。

おゝさうじや逃るが<sup>ママ</sup>かちぞ其螢 (文化十年)

出典 句稿消息(文化10)

㊦ 句稿消息、座五「其螢」「やよ螢」の二案を記し、「其螢」に丸印あり。志多良、中七以下「逃るが<sup>ママ</sup>かちぞやよ螢」。七番日記(13・7)、中七以下「逃るが<sup>ママ</sup>かちぞ其螢」。希杖本句集、「応そうだ逃るが<sup>ママ</sup>かちよ飛はたる」。

本町をぶらりくと螢哉 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・5)

行け螢とくく人のよぶうちに (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・11)・句稿消息・発句題叢・嘉永版発句集・発句鈔追加・推定文化十年、六月六日付其翠宛書簡

㊤ 嘉永版発句集、「ゆけ螢——呼うちに」。希杖本句集、上五「初螢」。

藪陰も湯が候ととぶ螢 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

露の葉に引つゝんでも螢哉 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・4)

㊦ 風間本八番日記(2・4)、「鼻紙〔に〕引つゝんでもほたん哉」。梅塵本八番日記、「鼻紙に引つゝんでもほたる哉」。

初螢なぜ引返すおれだぞよ (文政三年)

出典 八番日記(文政3・4)

㊧ 中七「なぜ引返ス」。

赤馬の鼻で吹たる螢哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・5)

又一つ川を越せとやとぶ螢 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・4)

㊨ 上五「又一ッ」。嘉永版発句集、「最うひとつ川を越とよ飛螢」。

螢火もあませばいやはやこれははや (文政十年)

(註、此年の六月朔日、火災に会ひし折の作、其後一茶は焼け残りの土蔵に住む)

出典 未詳

## 毛虫

涼しさにふらく下る毛虫哉 (文政六年)

出典 文政句帳(文政6・6)

㊟ だん袋・発句鈔追加、「涼んと」。

## 子子

日々懈怠不<sub>レ</sub>惜<sub>ニ</sub>寸陰<sub>一</sub>

けふの日も棒ふり虫よ翌も又 (文政二年)

出典 おらが春(文政2)・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 風問本八番日記(2・夏)、中七以下「棒ふり虫と暮にけり」。梅塵本八番日記、中七以下「子子むしと暮しけり」。

子子が天上するぞ三日の月 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・4)

㊟ 風問本、座五「三ケの月」。梅塵本、座五「三日の月」。おらが春、「子子の天上したり三ケの月」。文政句帳(5・5)、中七以下「天上するぞ門の月」。

子子の念仏おどりや墓の水 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

㊟ 梅塵本、中七「念仏をどりや」。

子子よせい出してふれ翌は盆 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・5、8)

## 蚊



蚊を焼くや紙燭にうつる妹が顔（寛政五年）

出典 寛政句帳（寛政5）

庵の蚊にあはれことしも喰れけり（文化八年）

出典 七番日記（文化8・4）

蚊柱やこんな家でもあればこそ（文化十年）

出典 七番日記（文化10・4）

㊟ 上五「か柱や」。

目出度さはことしの蚊にも喰れけり（文化十三年）

出典 七番日記（文化13・3、4）・随斎筆記・句稿消息・文政版発句集・希杖本句集・嘉永版発句集

㊟ 希杖本句集・嘉永版発句集、中七「今年の蚊にも」。

柱事などして遊ぶ藪蚊哉（文政元年）

出典 七番日記（文政1・5、12）

㊟ 希杖本句集、上五「柱立」。

蚊もちらりほらり是から老が世ぞ（文政二年）

出典 八番日記（文政2・4）・おらが春

㊟ 風間本八番日記、上五「蚊もちらり」<sup>(B)</sup>。梅塵本八番日記、上五「蚊もちらり」。

昼の蚊やだまりこくつて後から（文政七年）

出典 文政句帳（文政7・5、夏）・文政版発句集・糖塚集・嘉永版発句集

㊟ 文政版発句集・嘉永版発句集、座五「後ろから」。

柏原大火事、六月朔日也

尤<sup>ママ</sup>じや藪を焼れし藪蚊ども (文政十年)

出典 文政九・十年句帳写・希杖本句集

⑤ 文政九・十年句帳写、前書「柏原」。座五「藪蚊共」。同句帳写、文政九年の条に記すが、大火は文政十年閏六月一日。希杖本句集、「柏原大火事六月朔日也」と前書して、「焼つりの一夜に直る青田かな」に続けてこの句を記す。

蠅

五月廿日、熱は次第に盛にして……人の佛も見わき給ず、よろづたのみすくなきありさま也

寝すがたの蠅追ふもけふかぎり哉 (享和元年)

出典 父の終焉日記(文化4以降の成立と推定される)

⑥ 父の終焉日記、五月二十日の条は、「熱は次第に盛にして、朝は淡粉一ツばかりもたうべ給ひしが、昼比より御顔のけしきの青くと、目は半ふさぎ給ひ、物ばし「の」給ひたきやう唇うごかし給ふばかり、いづる息引くいきに、痰はころくくと命を責メ、是さへ次第により給ひ、窓をさし入日影も未の歩み<sup>ちかづ</sup>近く比、人の佛も見わき給はず、よろづたのみすくなきありさま也。あはれ、おのれ命に替へて、一度はすこやかなる父にして見まほしく、たうべたきと「の」給ふも、あしかりなんは戒<sup>と</sup>メしが、今は耆婆・遍<sup>篇</sup>鵲が洒落もとどかさらん、諸天善神の力も及ばざらんと、只念仏申より外にたのしみはな「か」りき。」

蠅除の草を釣して又どこへ (文化十二年)

出典 七番日記(文化12・6)

⑦ 前書「独楽庵を訪ふに不逢」。句稿消息、前書「独楽坊を訪に錠のかゝりて」、句「蠅よけの草を釣してさてどこへ」。杖の竹、前書「独楽坊を訪ふに、錠のかゝりければ、三界無安といふ事を」、句「蠅よけの草もつるして扱<sup>と</sup>どこえ」。

世がよくばも一つ留れ飯の蠅 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・4)・おらが春・文政版発句集・嘉永版発句集

⑧ 八番日記、中七「も一ツ留れ」。おらが春、「世がよくバも一ツ泊<sup>(止)</sup>れ」。文政版発句集・嘉永版発句集、中七「もひとつとまれ」。

心に思ことを

故郷は蠅まで人をさしにけり (文政二年)

出典 おらが春(文政2)

⑨ 前書「心ニ思ふことを」、「古郷ハ蠅迄人をさしニけり」。八番日記(2・夏)、中七「蠅すら人を」。もろともに須磨一見か笠の蠅 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・9)

⑩ 八番日記(4・6)、上五「おれとして」。発句鈔追加、中七「須磨見に行か」。やれ打な蠅が手をすり足をする (文政四年)

出典 梅塵本八番日記(文政4)・文政版発句集・嘉永版発句集

⑪ 風間本八番日記、「やよ打な蠅が手を摺」。

蚤

盃に蚤およぐぞよく (文化八年)

出典 七番日記(文化8・6)

⑫ 中七以下「蚤およぐ」「ぞ」よく」。

病中

蚤蠅にあなどられつけふも暮ぬ (文化十年)

出典 七番日記(文化10・6)・志多良・希杖本句集

蚤どもに松島見せて放けり (文化十年)

出典 句稿消息(文化10)

㊟ 七番日記(文化10・5)、座五「逃すぞよ」「逃しけり」。志多良、座五「逃しけり」。

帰庵

蚤どももつつがないぞよ草の庵 (文化十一年)

出典 七番日記(文化11・3)

㊟ 全集本、上五「蚤も」とするが、丸山全註などに従い「蚤〔ども〕も」と読む。句稿消息、前書「帰庵」、中七「まめそく才ぞ」。希杖本句集、前書「帰郷」、中七「つゝがないぞや」。

蚤の迹かぞへながらに添乳哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4)・おらが春・某宛文政四年六月十三日付書簡・文政版発句集・嘉永版発句集

㊟ 発句鈔追加、中七「かぞへながらも」。

ままつ子や昼寝仕事に蚤拾ふ (文政元年)

出典 七番日記(文政1・6)・嘉永版発句集

㊟ 七番日記、上五「繼つ子や」。

とぶな蚤それ／＼そこは角田川 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)

㊟ 中七「それ／＼そこ〔は〕」。

焼迹やほかり／＼と蚤騒ぐ (文政十年)

出典 未詳

㊦ 文政十年閏六月十五日付春耕宛書簡、前書「土蔵住居して、句「やけ土のほかりくや蚤(わ)さはぐ」。信毎版全集「発句篇」に、「圓『希杖本』上五中七『焼迹やほかりく』と誤る。

蟬

浜松や蟬によるべの浪の声 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

風はやや三保に吹入る蟬の声 (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

初蟬や人松陰をしたふ頃 (寛政七年)

出典 寛政紀行(寛政7・4)  
(西園)

㊦ 前文、「寺は道明寺と云。わづか行ば玉手山、尾州公の茶毘処あり。竜眼肉の木ありて、此かいわいの景地也。良の方にかづらき山見ゆる。折から遊山人処々につどふ」。座五「したふ比」。

浮島やうごきながらの蟬時雨 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・10)

蟬なくや柳ある家の朝の月 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・5)

大雨や大きな月や松の蟬 (文化元年)

出典 文化句帳(文化1・6)

㊦ 中七「大ナ月や」。

かくれ家は浴過けり松の蟬（文化元年）

出典 文化句帳（文化1・6）

せみ啼や梨にかぶせる紙袋（文化二年）

出典 文化句帳（文化2・6）

しみくくと夕の蟬ぞ哀れなる（文化五年）

出典 未詳

湖に尻を吹かせて蟬の鳴（文化九年）

出典 七番日記（文化9・5）・株番・句稿消息

④ 株番・句稿消息、座五「蟬のなく」。

せみ鳴や笠のやうなる鳩の海（文化十年）

出典 七番日記（文化10・4）

蟬なくや我家も石になるやうに（文化十年）

出典 七番日記（文化10・5）・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

④ 志多良・句稿消息・文政版発句集、「蟬鳴や——石に成るやうに」。嘉永版発句集、「蟬鳴や——なるやうに」。

恋をせよ恋をせよせよ夏のせみ（文化十年）

出典 七番日記（文化10・4）

④ 上五中七「恋をせよくく」。

住吉やあひに相生の蟬の声（文化十二年）

出典 句稿消息（文化12）

⑨ 七番日記(文化12・6)、上五「涼風や」。

松のせみどこ迄鳴て昼になる (文政二年)

出典 八番日記(文政2・6)・おらが春・嘉永版発句集・発句鈔追加

⑩ 八番日記、上五「松のセミ」。おらが春、座五「昼ニなる」。嘉永版発句集、座五「ひるになる」。

せみなくやつくぐ赤い風車 (文政二年)

出典 八番日記(文政2・閏4)

蟬啼や空にひつつく筑摩川 (しだら)

出典 発句題叢(文政3)・希杖本句集

⑪ 志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集、上五中七「蟬鳴や天にひつつく」。希杖本句集、上五「蟬の声」。七番日記(文化10・6)、「蟬鳴や空にひつつく最上川」。

蟬鳴や山から見ゆる大座敷 (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・6)

蟬鳴や盲法師が扇笠 (文政八年)

出典 文政句帳(文政8・6)

蓼喰虫

蓼あれば蓼喰ふ虫ありにけり (文政五年)

出典 文政句帳(文政5・4)

蜘蛛の子

蜘蛛の子はみなちりぐの身すぎ哉 (文政五年)

出典 文政句帳（文政5・4）  
蝸牛

朝やけがよろこばしいか蝸牛（文化二年）

出典 文化句帳（文化2・5）・発句類題集

㊦ 発句鈔追加、上五「朝やけの」。発句題叢・嘉永版発句集、上五「夕やけが」。

何事の一分別ぞ蝸牛（文化十年）

出典 七番日記（文化10・6）

夕月や大肌ぬいでかたつむり（文化十年）

出典 七番日記（文化10・6）・志多良・句稿消息・文政版発句集・嘉永版発句集

㊦ 七番日記・文政版発句集、座五「かたつむり」。嘉永版発句集、中七以下「大はだぬいでかたつむり」。某宛文政四年六月十三日付書簡、「坂口や大肌ぬいでかたつむり」。

蝸牛見よくおのが影ぼろし（文化十一年）

出典 七番日記（文化11・4）・句稿消息・発句鈔追加

㊦ 七番日記、座五「影ぼろし」。句稿消息・発句鈔追加、座五「影法師」。

雨一見のかたつむりにて候よ（文化十三年）

出典 七番日記（文化13・3、5）

㊦ 句稿消息、座五「候か」「候よ」「候か」二案を記し、「候か」に丸印を付す。

元政の垣に昼寝やかたつむり（文政四年）

出典 八番日記（文政4・5）



芋の葉や露の転る蝸牛 (文政七年)

出典 文政句帳(文政6・4)

夕立がよろこばしいかかたつぶり (しだら)

出典 希杖本句集

かたつぶりそろく登れ富士の山 (文政版一茶発句集)

出典 文政版発句集・嘉永版発句集

⑩ 嘉永版発句集、座五「不二の山」。文政句帳(6・10)、「蝸牛ともく不二へ上る也」。文政句帳(8・4)、「蝸牛気永に不士へ上る也」。

松魚

芝浦や初松魚より夜が明る (文政七年)

出典 文政句帳(文政7・夏)

⑪ 文政版発句集、中七以下「初鯉から夜の明る」。嘉永版発句集、中七以下「はつ鯉から夜のあける」。

鱒

活鱒や江戸潮近き昼の月 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・6)

⑫ 前書「開帳参」。

昼顔

昼顔やしほるる草を乗越く (寛政四年)

出典 寛政句帳(寛政4)

旅人に雨降花の咲にけり (文化七年)

出典 七番日記 (文化7・5)

㊦ 「雨降花」に「昼顔をいふ」と注記。

とうふ屋が来る昼貌が咲にけり (文化十年)

出典 七番日記 (文化10・6)・志多良・句稿消息・嘉永版発句集

㊦ 志多良・句稿消息、「昼顔が」。嘉永版発句集、「豆腐やが——昼顔が」。

昼貌や畠掘ても湯のけぶり (文化十一年)

出典 七番日記 (文化11・6)

㊦ 「昼顔や畠掘ても」。

浅間山

昼顔やぼつぼと燃る石ころへ (文化二年)

出典 おらが春 (文政2)

㊦ おらが春、上五「昼貞や」。文化句帳断簡 (文化5・6)、前書「浅間山」、句「昼顔やけぶりのかゝる石に迄」。

夕顔

夕貞にひさじぶりなる月よ哉 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

㊦ 上五「夕顔に」。

夕顔や兵共の雨祝 (享和三年)

出典 享和句帳 (享和3・10)

夕顔の長者になれよ一つ星 (文化五年)

出典 文化句帳(文化5・4)

㊦ 座五「二ツ星」。享和句帳(3・10)、「夕顔の長者になるぞ星見たら」「咲ば夕顔長者になれよ一つ星」。

夕貞の次其次が我家かな (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・6)

芥子の花

咲く日より雨に逢けりけしの花 (享和三年)

出典 享和句帳(享和3・4)

裸子が這ふけしの花咲にけり (文化九年)

出典 七番日記(文化9・3)

草庵に葉うる也けしの花 (文化十三年)

出典 七番日記(文化13・3、4)・句稿消息・希杖本句集

㊧ 七番日記(13・4)、中七「葉売る也」。

清書の赤い直しやけしの花 (文政四年)

出典 八番日記(文政4・6)

㊨ 風間本、中七「赤へ直しや」。梅塵本、中七以下「赤い直しや芥子の花」。

僧になる子のうつくしやけしの花(文政七年)

出典 文政句帳(文政7・夏)

牡丹

## 花嬌仏の三廻忌俳筵旧懐

目覚しの牡丹芍薬でありしよな (文化九年)

出典 七番日記(文化9・4)・株番

⑤ 七番日記、前書「四日花喬(嬌)仏」、中七「ぼたん芍薬で」。株番、前書「四日花嬌仏の三廻忌俳筵旧懐」。

是程のぼたん(嬌)と仕かたする子哉 (文政元年)

出典 七番日記(文政1・4)・文政版発句集・たねおろし・希杖本句集・嘉永版発句集

⑥ 文政版発句集、上五「是ほどの」。たねおろし、「正風院庭前」と前書して、「評判の牡丹はどれとどれにかな」(素鏡)

とともにこの句を記す。希杖本句集、「これほど々牡丹の仕方」。嘉永版発句集、「是ほどの——子かな」。七番日記(文政1・12)、「是程と牡丹の仕方」。文政九・十年句帳写(文政9)、「こらほど々牡丹の仕方する子かな」。

雨の夜や鉢の牡丹の品定 (文政三年)

出典 八番日記(文政3・1)

簾のみ青き屑屋の牡丹哉 (文政四年)

出典 梅塵本八番日記(文政4)

⑦ 上五「すだれのみ」、座五「ぼたん哉」。風間本、「簾の青き清き家のぼたん哉」。